

◆2021年6月第1週の説教

■日時：2021年6月6日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「アブラハムの信仰」

■聖書：新約ローマの信徒への手紙4：13－17（p278）

■讃美歌：155「山べにむかいて」458「信仰こそ旅路を」

お早うございます。

6月、最初の主日を迎えました。

すでに、今年に入ってからですが、4月4日（日）のイースターを除き、一度も通常の礼拝を守ることが出来ていません。実に、5ヶ月間にわたって、各家庭での礼拝が主になっています。

それでも、私にとっては、皆様の存在は少しも遠くなっていないのです。

昨年末から一度もお会いしていない、あるいは今年に入って一度しかお会いしていない方に対してもです。

不思議なことですが、それには理由があります。たとえお会い出来なくても、毎週週報や説教原稿などを送らせていただいているからです。その度ごとに送る方の姿を思い浮かべているからです。ですから、私にとっての皆様は、いつも身近にいます。

立川教会は、2021年度の定期総会とそれに続く臨時総会も、70年の歴史で初めて書面で行いました。戸惑われた方も少なくないと思いますが、それでもほとんどの方々がしっかり議決権を行使して下さり、感謝しています。但し、私が今年度をもって辞任する議案については、やはり書面ではなく、皆様の前で私の想いを述べたかったです。その点で、私が辞任することに驚かれた方々には申し訳なく、心からお詫び致します。

辞任を認めるか否かを判断する資料としては、小高伝道所で行ったメッセージ原稿だけであつたにもかかわらず、反対はなく、保留の方が2名で、その他の方は私の申し出を受け入れて下さり、深く感謝しています。

先週は、私の後任者になっていただきたいと考えている保科けい子牧師を福島からお招きし、メッセージを語っていただきました。揺るぎない福音信仰に立ち、高齢者が多い私たちを配慮してゆっくり語って下さり、本当に聴きやすかったです。礼拝の後、会堂は、保科先生を中心に和やかな雰囲気を訪れていました。今、先生を招聘するか否かについての投票を行っています。何よりも、祈りをもって、神様の御心を尋ねつつ、投票に参加して下さることを願っています。

さて、今日与えられた御言葉を見てまいりましょう。

ローマの信徒への手紙第4章13節から17節です。

まず、13節、14節です。

13：神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。

14：律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。

13節に「世界を受け継がせる」とありますが、その意味は、アブラハムやその子孫に「世界を支配させる」と言うことではありません。神様の御前にあって、義なる者、義しい者として認めると言う意味です。そして神様は、その義しさは、律法を守ることによってではなく、ただ神様を信じる信仰によってのみ与えられると言うのです。

当時のユダヤ社会を考えた時、パウロのこの主張は到底受け入れることは出来ませんでした。無理ありません。神様からモーセに与えられた十戒を基に、600を超える律法、即ち、日常生活において人々が守るべき掟があったからです。大切な安息日の過ごし方などもその一つです。つまり、それらの細々（こまごま）とした掟の上に社会が成り立っていました。そして、人々は、律法を守るためにあらゆる努力をしていました。何故なら、たとえ決まりの全てを守ることは出来なくても、少しでも守れる律法の数が増えれば、それだけ神様

の祝福が増し、御前にあって、より義しい者とされると考えたからです。

神様に義しい者とされ、祝福を受けることが、人々にとってどれほどの切実な願いであり、大切なことであつたでしょうか。

信仰心が篤ければ篤いほど、人々は必死になつて律法を守りました。

律法を守ることが出来なければ、神様からの祝福を受けることは出来ず、神様から見捨てられることを意味したからです。神様から見捨てられる。人生の破滅です。それほどまでに、律法は、人々の生活にとってなくてはならない拠り所でした。

それに対し、パウロは語るのです。

神様の前に義とされるのは、律法を守ることによってではないと。

律法によらず、ただ神様を信じる信仰、それだけで十分なのだと。

驚くべき言葉でした。

しかし、同時に、この言葉は人々を躓かせます。

それまで必死に律法に縋（すが）って生きようとした自分たちの日頃の努力が、節制が、御前に義しいとされるには意味のないものとされたからです。

彼らは問います。それでは一体何のために、自分たちはこれまで一生懸命に律法を守って来たのかと。神様の祝福を受けるためではないかと。それなのに、この男は、律法を守ることによって御前に義とされることはないと言う。では、どうしろと言うのかと。

パウロは答えます。

15、16 節です。

15：実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。

16：従つて、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムの全ての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。

15 節を分かりやすく言い換えれば、決まりと言うものがあるから、それに対する違反があるのであり、決まりがなければ、それに対する違反もないと言うのです。

決まりは、それを破る者を許しません。破る者には、怒りが向けられます。つまり、律法は、神様からの怒りを招くために与えられていると言う理解です。そして、パウロは続く 16 節でアブラハムを登場させ、神様が私たちが義（ただ）しい者とされるのは、アブラハムのような信仰を持って生きることであると述べて行きます。

それでは、パウロが模範として示したアブラハムの信仰とはどのようなものでしょうか。それを知るために、創世記に記されている二つの出来事を見ておきたいと思います。

始めに創世記第 12 章 1 節から 4 節です。（15 頁）

1：主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

2：わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

3：あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。

4：アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

アブラムは、ハランを出発したとき 75 歳であった。

良く知られているアブラハムの旅立ちの場面です。

これが一つ。次に、第 22 章 1 節から 13 節を読みます。(31 頁)

1 : これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、

2 : 神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

3 : 次の朝早く、アブラハムはろばに薪を置き、献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った。

4 : 三日目になって、アブラハムが目を凝らすと、遠くにその場所が見えたので、アブラハムは若者に言った。

5 : 「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていてください。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻って来る。」

6 : アブラハムは、焼き尽くす献げ物に用いる薪を取って、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。二人は一緒に歩いて行った。

7 : イサクは父アブラハムに、「わたしのお父さん」と呼びかけた。彼が、「ここにいる、わたしの子よ」と答えると、イサクは言った。「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」

8 : アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。

9 : 神が命じられた場所に着くと、アブラハムそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。

10：そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。

11：そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、

12：御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」

13：アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。

この二つとも、とても厳しい話しです。

と言うより、信じられない話しです。

特に、アブラハムが息子イサクを神様に捧げる話しは、まともに考えれば残酷過ぎて耐えることが出来ません。

しかし、感情に押し流されることなく、この二つの場面、前者は、行く先を知らずして旅立つアブラハム、そして後者はイサク奉獻の場面ですが、この二つに共通する事柄が何かを考える時、そこにはある大切な問いが私たちに向けられていることに気が付きます。それは、創造主と被造物との関係、そして、自分とは一体何者なのかと言う問いです。

イサク奉獻の出来事から考えてみます。

すでに年老いていたアブラハムとその妻サラにとって、子どもが生まれることなど不可能でした。その不可能を可能にしたのは、神様からの一方的な恵み、ただそれだけでした。人間には不可能な世界に神様が介入し、アブラハムとサラの祈りに応え、イサクを二人に与えたのです。つまり、イサクは、神様の恵みによって与えられた子どもでした。そのイサクを神様に捧げよとの命令は、アブラハムにとって、主が与え、主が取られることであり、イサクは、決して自らの所有に帰するものではなかったのです。つまり、誰とも代えることの出来ない最愛の息子であっても、イサクは神様からの恵みの賜物であり、イサクは、神様に帰する者でした。どんなに大切な、血を分けた息子と雖（いえど）も、イサク

は神様に帰する者であることをアブラハムは受け入れたのです、ただ、信仰によってです。そして、神様は、その信仰を義と認められました。

前者のアブラハムの旅立ちにしても、問われているのは同じ問題です。

自分が生まれ育った故郷。財を築き、生活を安定させ、友人知人にも恵まれた土地。

しかし、アブラハムにとって恵まれたその環境の全ては、神様によって与えられた、備えられた環境であり、その一切の主（あるじ）は、神様でした。自分は、神様によって造られた土の器であるとの峻厳たる自覚です。

だからこそ、土の器に過ぎない自分に命の息を吹き込まれた方が命じることであるなら、その命に従うことは自然であり、導かれるままに旅立つことが出来たのです。

このように、アブラハムに関わるこの二つの話しが私たちに教えているのは、私たちは神様によって造られた被造物であること、そして、私たちを造られた神様を信じる信仰によって、神様の命じるままに従う生き方こそ、世界を受け継ぐ、御心に適う、神様に義とされる生き方であるのだということです。

さらにパウロは語ります。

17 節です。

17：「（神様が）わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのですと。

今日、パウロが語ったアブラハムの信仰から、私たちが学ぶべきことがあります。

それは、何事にも固執することなく、自分に与えられている全ては、今生活している一切の環境も含めて、神様からの恵みであるということです。この命、この身体、家族の一人ひとり、大切な友人や知人、職場など一切です。

それだけではありません。

この教会も、教会の交わりも、この建物も、庭も、外にある空に真っすぐに伸びる十字架も、その全ては神様からの恵みであることをです。

そして、それら全てに対し、自分を満足させるためではなく、神様の栄光を現すため、そのことだけを望み求めて関わり、奉仕をする、そのような者となることを、パウロは私たちに呼びかけています。

祈りましょう。